【郷土史への扉】

西郷隆盛と霧島 その❷

西郷と郷中教育

明治維新から一五〇年に当たる平成三十年のNHK大河ドラマが「西郷どん」に決まりました。来年、平成二十九年は国内最後の内戦「西南の役」から一四〇年の節目の年です。

今回は、清廉な人柄や心の広さで会う人々を魅了したといわれる西郷の人柄がいつ、どのようにしてできたのか紹介します。

西郷隆盛の幼年時代

西郷隆盛は、文政十（一八二八）年十二月に鹿児島の下加治屋町で西郷吉兵衛の長男として生まれました。幼名は小吉で、その後、吉之助、隆盛と改名し、※1雅号は南洲と名乗りました。

西郷家の家格は小姓与と呼ばれる最下級の身分（下から二番目の階級）で、父・吉兵衛は勘定方（藩の会計）小頭を勤め、清廉で実直な役人であったといわれています。

西郷家は※2小禄の上に大家族（七人兄弟）であったため、非常に貧しい暮らしをしていました。雨が降ると雨漏りがして、一つの布団に兄弟が足を突っ込んで眠った、という逸話が残っているほどでした。

西郷の幼年期は、貧しい中でも父親の教育の元で、公正で誠実な少年に育ちましたが、一番影響を与えたのは「郷中教育」ではないでしょうか。

郷中教育とは

郷中教育とは、薩摩藩の独特な青少年教育で、地域（郷）ごとに実践された集団教育です。その特徴は、教師の指導によらず先輩が後輩を指導し、同輩はお互いを高め合う点にあります。

※3島津家中興の祖と言われる戦国時代の武将・島津忠良（後の日新公）は、人の道、生き方、人の上に立つ者の心得などを分かりやすく広めるため「いろは歌」を天文十四（一五四五）年に作りました。「いろは歌」は理論よりも実際の行動を重んじる薩摩藩の気風に合っており、郷中教育の教典として用いられました。郷中教育には、次のような教えがあります。

- 先輩、後輩の関係を重んじる。
- 常に文武に励む。
- 山坂を歩いて体を鍛える。
- 親に口答えしない。
- 先輩の教えを守る。
- 嘘はつかない。
- 小さな子どもをいじめない。
- 金は持ち歩かない。
- 足袋、頭巾、襟巻の着用禁止。
- 木綿の着物を着る。
- どのような場合でも刀は抜くな。
- 刀を抜いたら目的を達成しろ。

（『郷中教育の研究』より抜粋）

郷中内の青少年は、年齢によって「稚児」と「二才」に分かれて集団教育を行いました。

稚児	小稚児	六～十歳
	長稚児	十一～十四歳
二才		十五～二十五歳
		※妻帯するまで

郷中教育で育んだ薩摩気質

このように、薩摩藩士の子弟は集団教育を受け、自らを律する心や異年齢の接し方、強靭な体づくりなど徹底的に鍛えられました。

郷中教育は一見スパルタ教育のように見られますが、年齢の違う子ども同士が教え学び合うためには、相手への思いやりが必要です。相手を理解し、伝え方も工夫するため、自発性、協調性、考える力を養うには、当時としては最適な教育方法だったように思われます。

西郷は晩年、次のような言葉を残しています。『万人の上に位する者、己れを慎み、品行を正しくし、※4驕奢を戒め、節倹を勉め、職事に勤労して人民の標準となり、下民其の勤労を気の毒に思ふ様ならでは、政令は行はれ難し』。これはまさに郷中教育で育んだ教えではないでしょうか。

（文責＝鈴）

※1　文人、書家などが付ける風雅な名。
※2　給料の低い武士。
※3　島津家発展の基礎を築いた。
※4　おごり高ぶること。